

阿部次郎に会うことを避けた竹内仁

曾根原 理

はじめに

竹内仁（たけのうち まさし、1898-1922）は、昭和初期の社会主義者として知られている。彼は片上家の四男（第六子）として松山に生まれ、著名な評論家の片上伸（1884-1928）は14歳上の長兄である。上京して早稲田中学校を卒業した後、1916年（大正5）9月に仙台の第二高等学校に入学し、翌年3月に竹内家の養子となった。¹⁾ 早くから頭脳明晰で知られ、1919年に東京帝国大学の法学部政治学科に入学したが、社会主義思想の研究に没頭し、翌年3月に文学部倫理学科に転じた。²⁾

在学中に兄の片上伸の仲介で、『我等』1922年（大正11）2月号に「リツプスの人格主義に就て -阿部次郎氏のそれを批評する前に-」、続いて『新潮』の同月号に「阿部次郎氏の人格主義を難ず」が掲載される。これにより若手評論家として脚光を浴びた竹内は、阿部次郎からの反論「竹内仁氏に答ふ」（『改造』1922年3月号）に対して、「再び阿部次郎氏に」（『新潮』1922年4月号）で再反論し、さらに知名度を上げた。

こうした将来を嘱望された存在であったものの、同年11月10日に彼の人生は意外な形で幕切れを迎えた。許婚の両親を殺害し、自らも縊死を遂げたのである。³⁾ このため、阿部との論争も展開を見ないまま終焉することになった。⁴⁾

本稿では竹内から阿部への新発見書簡について、多少の解説を添えて紹介を行う。

1. 竹内に関する近年の研究

竹内仁は主に、阿部次郎と対峙して大正教養主義から社会主義思想への過渡期を示す存在として把握されてきた。たとえば中村勝範は、大正9年当時を革命思想・運動が高揚した時期ととらえ、その中で「阿部の人格主義が個人の内面世界から社会的側面を照明した時、それは社会主義的過激思想に対立する思想に転化した」と論じた。そして村松正俊、平林初之輔、江間道助、新居格らの阿部批判を挙げた上で、竹内仁も阿部の人格主義を「労働者に向い、お前はいま資本家を敬愛していないから、お前の要求に賛成してやる訳にはいかない」という宣言と受けとめ批判したと述べる。阿部の人格主義は社会主義思想・運動が盛んになる中で、「その評価は著しく低下しつつあった」ともいう。中村によれば阿部の人格主義は、社会主義（竹内を含む）に克服された不十分なもの、と把握されるのである。⁵⁾

そうした、時代遅れの人格主義、勃興しつつある社会主義、という二項対立の図式には、その後に変化が見られる。渡辺和靖は竹内仁について、彼が求めていたものは新しい共同性であったと論じる。「人格主義とマルクス主義は、イデオロギーという側面では、まったく異なる思想的態度として評価されるが、新しい共同性の根拠の模索という点では共通性があった」とする指摘は、人格主義と社会主義の間に対立だけでなく同根の側面もあったという観点を導入している。⁶⁾

明治の立身出世主義が終焉し、天下国家を論じることが難しくなった中から、外面的な成果でなく、自らの人格を成長させることに価値を見出す人格主義（同根の理想主義、教養主義…修養主義）が生まれた。その成立期を担った代表的存在が阿部次郎であった。それに対し、マルクス

主義的な立場から、その個人主義的なありよう、社会や政治への無関心が批判された。竹内仁は、そうした社会主義的立場からの批判の先駆的存在として把握されてきたが、①竹内はむしろ人格主義の精神を受け継ぎ批判しているのではないか、②人格主義自体の内部に批判や内省があるといった点で考えるなら、大正教養主義から昭和初期の社会主義への転換点に竹内を位置づけるのは過剰な単純化ではないか、との指摘も生まれた。⁷⁾

阿部と竹内の対立を、「立身出世主義→教養主義→社会主義」の図式に当てはめて単純化することに対する疑問の声が挙がる中で、竹内の内面や事績を再度見直す必要があるのかもしれない。

2. 竹内書簡の発見

東北大学文学部・文学研究科は、阿部次郎が逝去した後に、阿部の旧宅（同時に阿部日本文化研究所）を遺族から寄贈され管理してきた。そこには阿部次郎あての書簡と、多少の阿部次郎発信の書簡（全集編集時に収集されたものか）が残されていた。2020年（令和2）に文学研究科は、4千点を超える書簡類を史料館に寄託し整理作業が始まった。⁸⁾ 2021年から目録の公開が行われ、現在も継続中ではあるが、整理作業が済んだものから史料館ホームページ上で目録データベースが順次公開されている。そうした中で、2021年3月の目録公開資料に竹内から阿部への書簡が1点発見された。

同書簡は、1922年（大正11）2月に『我等』と『新潮』に竹内の阿部批判が掲載された時期に送付され、竹内が二高生時代から傾倒していた阿部に対し、いきなり批判を公表するに至った葛藤などを説明している。

阿部次郎の日記には、本書簡に関する言及は見られないが、2月12日の記事に「新潮に出た竹内仁の攻撃を読む…竹内はヒステリカルか鋭さを持つ」とあり、同日「返事」を書き出し15日に書き上げ「気が軽くなる」と記す。

阿部と竹内の関係については既に知られていることも少なくないが、本書簡の存在と、そこに記された竹内の二高時代からの阿部に対する思いや、森戸事件以降の具体的な接触などについては、新たな事実が発掘されたといえる。両者は東京帝国大学の先輩・後輩であるが、具体的な接点の有無について従来触れられた例を知らない。しかし本書簡によって、竹内がある思いを持って、意図的に阿部を避けていたことが明らかになった。

3. 竹内書簡の翻刻

投函年月日：大正十一年二月九日

差出人住所・署名：小石川区高田老松町十七、橋本武方 竹内仁

宛先：市外、中野町、一〇一八番地 阿部次郎先生

形態：封書（書留）、便箋でなく原稿用紙4枚を使用

脇付等：侍史

本文：

まだ一度もお目にかゝったこともございませんのに、突然お手紙を差し上げる不躰をお許し下さいませ。私は、「我等」と「新潮」との二月号に先生の人格主義への非難を書いた者でございます⁽¹⁾。「我等」の方には、あまり誤植が多いので別紙にその正誤表をしたためて置きましたから、

若しあれをお読み下さいましたならば、どうぞ御一覽下さる様お願い致します。

先生に申し上げたいことは実に沢山有るのでございますが、今は唯だ一つのことだけ、是非おことはりして置きたいと存じます。それは、あの二つの論文の始めの方で断って置きました様に先生を私かに『師』とまで呼んでゐた私が、その『師』を公けに非難する前に何故個人的に手紙でなり又はお目にかゝってなり、先生の反省を求めようとしなかったか、本当に自分の師と呼ぶ程に尊敬してゐたのなら、何故さういふ親切な情誼の有る態度を尽さないで、いきなり公けの非難をしたかといふことでございます。

勿論私は一度はさうしようと思ひました。去年の五月の「解放」に「人格主義と労働運動」⁽²⁾が出た時には、もうどうしても先生にお別れしなければならない、と思ひ、一つには私自身にとっての悲しい『別れの時』を記念するために、二つには先生に反省して戴くために、夏休みの中に先生が一高時代にお書きになったものから最近のものに至るまで全部読んで先生の思想と人格との展開の跡を詳しく辿って、先生の評伝といった様なものを書いてお送りしようと思ひ、一高の図書館で古い校友会雑誌を見せて貰ふ手続をまですたのでした。けれど、いろ／＼考へて見ると、自分の書いたもの位で先生が強く反省して下さりさうもない（それは決して先生の反省力を疑ふのではなくして先生に及ぼす自分の影響力に自信が持てなかったからです）、先生の思想を動かすことが出来ると考へる程に自分の力を高く見つめる訳には行かない、そんなものを書いてお送りしたところで到底先生の思想を動かすことは出来さうもない、先生のお家に参上してお目にかゝって種々申し上げたところでやはり同じことだ、で結局お互ひに不満な気持ちで別れることになる、そして、その上で今度は公けに先生への非難を書くことになる、さうすると、その時はもはや、先生と議論を上下してお互ひに相譲らなかつた時の不快な気持ちがあるであらうために、『氏に対する個人的な憎悪や怨恨などに基づくものでは全くない』とは言へなくなる、多少とも不純な、先生に対する不快な気持ちがまぢってくることになる一か様な理由でその企ては中止しました（併し自分にとっての悲しい『別れの時』を記念するための先生の評伝ともいふべきものは、もっと後に、是非書きたいとは思つて居ります）。とにかく先生に反省して戴くために、公けの非難をする前に、先生と個人的交渉を持つといふことは、以上の様な理由で思ひ止まった次第でございます。

二高にゐて先生の「三太郎の日記」や「ツァラツストラの解釈並びに批評」などを愛読してゐた時分に、何度も先生にお手紙を差し上げたいと思つたり、先生のお家へお伺いしたいと思つたりしたのを、思ひ止まって、何の個人的な交渉も持たなかつたことを今ではやはりよかつたと思つて居ります⁽³⁾。そしてさういふ態度も、「三太郎の日記」から、即ち先生が一高時代に内村鑑三氏に対してお取りになつた態度⁽⁴⁾から教へられたものであることを感謝して居ります。

御健康を祈ります。そして殊に、現実の諸問題に対する態度について今一度考へ直して下さることを心の底から祈ります。

一昨年春、大学の講堂で森戸事件について擁護せられた時⁽⁵⁾の始めて見た先生の御姿、殊に最近二度ばかり目白からの電車の中でよそ乍ら直ぐ傍で見た先生のお眼—それらの印象を「三太郎の日記」などから来る長い間の先生の人への憧憬と、最近の先生に対する不満、毒々しい皮肉を浴せかけたい様な気持ちとが妙に私の中にまじりあつてゐます。『先生』に対して、あんな皮肉も浴せなければならぬことを、悲しく思ひます⁽⁶⁾。併しこんな女々しい気持ちにばかり捉はれてゐることは出来ません。思想の上では、飽くまで、先生が反省して下さるまで、戦はな

ければなりません。とは言へ、今後どんなに激しく先生に打つかることがあるにしても、曾て先生を心の底から「先生」と呼んだ気持だけはいつまでも思ひ返したいと思っております。

御洋行⁽⁷⁾の前途に幸多からむことを祈ります。そして繰り返し、考へ直して下さることを祈ります。

二月九日朝

竹内仁

阿部次郎先生

(追伸) この頃郵便不着のことがよくある様ですから念のため書留に致します。公けの論文の中では氏と書き乍ら、私信の中では先生とお呼びする勝手をお咎め下さるでせうか。私自身にとってはそれは自然だと思へるのですけれど。

(正誤表省略)

翻刻注

- (1) 『我等』1922年(大正11)2月号の「リップスの人格主義に就て—阿部次郎氏のそれを批評する前に」および『新潮』同年同月号の「阿部次郎氏の人格主義を難ず」を指す。
- (2) のちに『人格主義』(『阿部次郎全集』6、角川書店、1961年所収)に収録。
- (3) 竹内は『我等』掲載原稿を出版に回す際に「阿部氏に対して気の毒さを感じることを禁じ得ない。二高時代に、あんなに私淑してみたことを思ふと。併し、今となってみれば、個人的に近づきになって置かなかったことを、よかったと思ふ」と記録している(『竹内仁遺稿』、『近代日本学芸資料叢書 第3輯』湖北社、1980年、p.240)。
- (4) 『三太郎の日記 第一』「十七 年少の諸友の前に」2の「私は中学校から高等学校にかけて内村鑑三先生の文章を愛読した。出来るならば先生に親炙して教を請ひたいと思つてみた。(中略)併し私は私の個性の独立が早晚明瞭に発展して遂に先生に背かなければならぬ日が来ることの恐ろしさに、先生の親しい御弟子になる気にはなれなかつた。(中略)自分は依然として先生の文章にのみ親しんで、遠くから隠れて先生の感化に浴してみた」を指すか(『阿部次郎全集』1、角川書店、1960年、pp.122-123)。
- (5) 1920年(大正9)2月27日の講演(後に『人格主義』に収録)。
- (6) 1月22日付の竹内書簡(留岡清男あて)に「新潮に寄せたものは…出来るだけ謙遜な態度を失ふまいと努めたが、少々もすれば…皮肉が口をついて出さうになって弱った」とある(注3『竹内仁遺稿』p.513)。
- (7) 阿部次郎の日記によれば、5月7日に鉄道で東京発神戸着、9日同神戸発下関着。年譜では10日に欧州に向け渡航と推定。確かに下関から和辻夫妻あてに送られた葉書には「明日正午愈々日本を去ります…港の気笛を音をきながら 五月九日夜十一時」とある。以上は『阿部次郎全集』14(角川書店、1962年)p.437、同全集17(同、1966年)pp.476-477、同全集16(同、1963年)p.181。
- (8) 両者の対立点は、所得の増加は労働者を本質的に幸福にするものではないとする阿部に対し、その議論は実践的には無価値でありブルジョア的であるとする竹内の考えに現れた。船山信一「大正哲学史研究」(『船山信一著作集』7、こぶし書房、1999年、p.90-92)など参照。
- (9) 阿部は竹内への反論として「竹内仁氏に答ふ」を著した(『改造』に掲載、改題し『人格主義』に所収)。日記の「返事」について、2月13日の記事に「竹内への返事を改造に」とあるので、単なる私信でなく前掲論文のことと思われる。

注

- 1) 『二高一覧(大正5-6)』の生徒名簿「第一部第一年乙組(独法文科)四十二人」の冒頭に「私立早稲田 片上仁 愛媛」とあり。同(大正6-7)の同「四十一人」の冒頭に「私立早稲田 竹内仁 東京」、同(大正7-8)の同「三十五人」の冒頭に同一記述があり、第二高等学校一年生の年に東京の竹内家に養子に入ったことが裏づけられる。

- 2) 1916年（大正5）7月31日付の竹内滝次郎宛書簡に、自ら「僕の首席入学と云ひ…望外の喜び」と記す（竹内仁遺稿刊行会編『竹内仁遺稿』イデア書院、1928年、p.244）。注1のとおり首席は卒業年まで続いたようだ（当時は生徒を成績順に表示）。また『二高一覧（大正8-9）』の「卒業生氏名」大正八年第一部独法文科の冒頭に「東法 竹内仁 東京」とあり、二高卒業後に東京帝国大学法学部に入学したことが裏づけられる。
- 3) 『同窓会々報』〈第二高等学校同窓会〉16号（1923年7月刊）の「会員死亡」（pp.37-38）に「左記の諸君は昨年十二月以後に於て死亡せられたる者にして孰れも春秋鼎さに盛んに有為の才を蔵し今後も益々為すあらんとしたるに一朝此厄に遇ひたるは寔に痛惜に堪へず本会は弔辞を呈して哀悼の意を表したり」として「竹内仁」を含む20名の氏名を列記しており、同窓会の弔意を伝えている。
- 4) 以上の竹内の伝記的事実などについては、注2『竹内仁遺稿』、小田切秀雄「解説」（『現代文芸評論集（一）』〈現代日本文学全集94〉筑摩書房、1961年）、阿部十三「竹内仁論 その人生と批評と死」<http://www.hanano.jp/culture/bouken/bouken099.html>（2013年9月7日付、2021.5.2閲覧）などを参照した。
- 5) 引用は、中村勝範「阿部次郎と森戸辰男事件」（笠原英彦・玉井清編『日本政治の構造と展開』慶応大学出版会、1998年）による。
- 6) 佐藤弘夫責任編集『概説日本思想史』（ミネルヴァ書房、2005年）第22章「都市と大衆の思想」（渡辺和靖分担執筆）pp.261-262。
- 7) 高田里恵子「人格主義と教養主義」（荏部直ほか編『日本思想史講座4近代』ペリかん社、2013年）参照。
- 8) 阿部次郎旧蔵書簡については、大平千枝子『父 阿部次郎』（東北大学出版会、1999年）所収の「書簡整理」（初出1979年）、青木生子ほか編『阿部次郎をめぐる手紙』（翰林書房、2010年）所収の小幡明子「発刊によせて」に関連記述がある。前者には「父が手もとに保存した書簡は、恐らく万を超え」との記述等があるが、その後の伝来については不明の点が少なくない。